

堀河百首題「野」をめぐって

内藤 愛子

堀河百首題の雑の歌題のうち、「山」「河」「野」「関」「橋」「海路」の六歌題は、既に指摘されているように歌枕、地名、名所が歌題設定に当って重要な要素を占めている。それらは、雑の歌題の配列においても、集中的に並らべられ、配列構成がなされたと考えられる。その六歌題のうち、今回は、「野」の歌題を取り上げて、そこに詠まれている歌枕、地名、名所の特性を抽出し、その歌題の特徴をとらえてみたい。

「野」という単題は、堀河百首題と共通する歌題が多数見られる。『和漢朗詠集』には見られる。が、『堀河百首』成立以前の勅撰集や歌合の歌題として見当らない。『古今六帖』第二帖に「野」の分類が見られ、しかも、「春の野」「夏の野」「秋の野」「冬の野」等と細分類がなされている。

まず、「野」の十六首の詠歌を具体的に検討してみよう。前述のとおり、歌枕、地名、名所が詠まれ、それと共に「草」や「花」を詠み込まれた歌が多数を占めている。

具体的にみてみると、「浅茅」(1393・1395)「ささめ」(1394・1399)「ぬるて」(1403)「萩」(1404)「草」(1397・1402・1406)「花」(1396・1398・1400・1405)である。

そのうち、「草」「衣」「露」の歌語と歌枕、地名を詠み込んだ類型表現の詠歌が挙げられる。

1397 あつさゆみいるののくさのふかければあさゆく人のそてそ露けき

(頌季)

1399 月きよみあけの、はらの夕露にささめわけくるころもさぬれぬ

(仲実)

1404 宮城野の秋の萩原わけゆけは上葉の露に神そぬれぬ(永縁)

これらの三首は、後朝の別れを意識した詠歌に仕上げられている。

また、「花」を詠み込んだ歌として次の四首が見える。

1396 秋の野を心のさらにわけゆけはをのかいろいろさける花かな

1398 みやき野のち、の草葉をむすひをきて花みん程は絶す通はん

1400 さま／＼に心そとまるみやきの、花の色／＼むしのこゑ／＼

1405 ともかくも人にはての野へにきてちくさのはなをひとりみる哉

とあり、いずれも、秋の野にたくさん咲いている花を注目した類型発

想及び類型表現の詠歌であり、1398・1405には、季節を表わす歌語は詠ま

れていないが、秋の野と捉えて間違いないであろう。

また、季節及び季節を表わす歌語が詠まれている歌は十六首中九首

みられる。それは、秋から冬にかけての季節を表わす歌語が詠まれて

いる。秋という季節を詠み入れた歌(1404)のみで、秋の季節を表わす

歌材としては、「すがる」(1396)「虫の声」(1400)「うすらなく」(1406)が

あり、晩秋から冬にかけての季節を表わす歌語として「霜枯」(1393・

1407)「枯野」(1401)が詠み込まれている。

このように、「野」の歌題において、『堀河百首』詠出歌人達は、少なからず、秋から冬にかけての季節を意識して捉えていたと言つて間違いないであろう。

次に、「野」の詠歌の特徴の一つとして、十六首のうち、十二首までが、歌枕、地名、名所が詠み込まれていることが挙げられる。

「野」の詠歌にみられる歌枕、地名、名所は、「粟津野」、「あけの原」、「いはて野」、「入野」、「あな伏原」、「小倉」、「嵯峨」、「吹上小野」、「布留野」、「宮城野」、「武蔵野」である。それらの歌枕、地名、名所の各々を具体的に検討してみることにしよう。

これらの歌枕、地名、名所のうち、「あけの原」、「いはての」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集には詠まれていない歌枕、地名であり、どちらにも『堀河百首』の「野」の詠歌一首のみに詠み込まれたものである。

「あけの原」は、藤原仲実の歌（1399）に

1399 月きよみあけの、はらの夕露にさ、めわけくるころもさぬれぬ

とあり、「あけの原」は所在不明の地名である。「あけの原」の「あけ」が「明」と同音から喚起されるイメージに拠つて初句の「月きよみ」と対応する地名であり、音から連想されるイメージを生かすことが出来たのであろう。

「あけの原」は、管見の範囲に寄ると先例歌がなく、『堀河百首』成立以後においても詠まれておらず、藤原仲実の歌一首のみであり、独創的で、一過性の地名として受け取ることが出来る。しかも、「あけの原」は、後世に影響を与えるような歌枕表現に成り得ず、しかもそれは、従来にない地名に拠つて新奇さを希求したと言える。

次に、「いはての」について検討してみよう。「いはての」は『堀河

百首』において、隆源の歌（1405）一首のみに詠まれている。

1405 ともかくも人はいはてののへにきてちくさのはなをひとりみる哉
「いはて」は、『八雲御抄』に「いはて山」が見え、そこには国名不記とあり、その所在に関して明確でない歌枕、地名である。隆源の歌は、「いはて」が、その音からくるイメージから「言わで」に掛けた用法に拠つて、野に咲く、たくさんの花を一人で見に行く心情を詠じている。

「いはて」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集において、管見したところに拠ると、先例が見当たらない。だが、『堀河百首』成立以後の勅撰集においては、「いはて」や「いはての山」という歌枕、地名が詠まれている。「いはて」は、『千載集』（663）、『新古今集』（1786）に詠まれ、「いはての山」は『千載集』（651・667）に見られる。

663 思へどもいはで忍ぶのすり衣心のうちに乱れぬるかな

1786 みちのくのはで忍ぶはえぞしらぬかきつくしてよつぼのいしぶ

み

651 思へどもいはでの山に年を経て朽ちやはてなん谷のうもれ木

667 人しれぬ涙の川のみなかみやいはでの山の谷のした水

いずれも、恋愛の詠歌で、「いはて」に「言はで」を掛けて、忍ぶ恋情を托している。

このように、「いはての」は、『堀河百首』詠出当時において初出で新奇な歌枕、地名であり、『堀河百首』以後にも詠み続けられ、歌枕としての定着化がみられる。しかも、「いはて」に関連した歌枕は多様化されたと捉えられる。

「野」の歌題において、歌例の掲げられない地名として「吹上小野」が挙げられる。それは源国信の詠歌（1395）で

1395 浜風のふきあけのをのあさちはら波よるからにたまそちりける

とあり、「吹上」は、「吹き上げ」の音からのイメージを活かし、「浜風」の縁語として「波」が詠み込まれ、縁語表現を駆使して一首を構成している。このような詠み方は、「吹上浜」の影響を受け、それを意識した詠作方法である。

「吹上浜」や「吹上」は、紀伊の国の歌枕であり、それらは、『古今集』(272) やその詞書にみられ、同歌は、『古今六帖』(373)にもみられ、それ以来詠まれていた歌枕である。

272秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪の寄するか

『堀河百首』において、「吹上浜」を詠じた歌は次の二首である。

988浦風にふきあけのはまの浜千鳥なみたちくらしよはになくなり

991おきつ風ふきあけのはまのさむければ冬のよすから千鳥なくなり

いずれも、「吹き上げ」の意から、風が連想され、「吹上浜」と「千鳥」が詠まれている。「吹上浜」と「千鳥」の組合わせ歌は、『堀河百首』以前には見られない。

このように、「吹上小野」は、『古今集』以来詠まれている「吹上」や「吹上浜」から創作されたか、「浜」が「小野」に改変されたものと推察され、新奇な歌枕を意図したものであろう。

次に、「入野」について検討してみよう。『堀河百首』において「入野」を詠み入れている歌は二首(167・1397)挙げられる。

167ふゆ草と見えし入野のをささわらやよひのあめにふかみとりなり

1397あつさゆみ入野のくさの深ければあさゆく人のそてそ露けき

いずれも、「入野」と「草」が詠まれている。藤原顕季の歌(1397)は、「入野」の「入る」に「射る」を掛け、しかも、「射る」の枕詞として「梓弓」を置き、技巧的な詠法に拠っている。

「入野」は、山城の国の歌枕で、『万葉集』二首(1272・2281)見られる。1272たちのしりさやにいりのにくすひくわきもまそてにきせてむとか

も夏草かるも

2281さをしかの入野のすすきはつをはなれつれのときか妹かてまかむこの二首のうち、後の歌(2281)は、『新古今集』(346)や『人麿集』(154)に掲載されているが、「さを鹿のいるのの薄初尾花いつしか妹が手枕にせむ」となり、下句に改変がみられる。

「入野」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集において、詠まれた歌例が見当らず、『同百首』以降において、『千載集』(110)では「入野の原」がみられ、『新古今集』(346)では、前述の歌が掲げられている。110みちとほみ入野の原のつほすみれるのかたみにつみてかへらんこの詠歌は、詞書に、「嘉承二年后官の歌合に、葦葉を詠める」とあり、出典は歌合歌である。

また、『堀河百首』以降の私家集には、「入野」を詠み入れた歌例が数多くみられる。例えば、『清輔集』404(『私家集大成・中古Ⅱ』83)や『後鳥羽院御集』806(『私家集大成・中世Ⅱ』1)に

804さをしかの入野のす、きほのめかせ秋のさかりになりはてすとも

806さをしかのいるの、す、き露しけみたか手枕に月やとらんとある。

このように、「入野」は、『万葉集』に典拠を求めた歌枕と言えるだろう。また、『堀河百首』の詠出当時以降より、「入野」は、詠まれ、歌枕として定着化したと推測が可能であろう。

「入野」と同様に掛詞として詠まれている歌枕、地名として「粟津野」と「布留野」が挙げられる。それらは、いずれも万葉時代に詠まれている歌枕、地名である。

『堀河百首』において「粟津野」を詠じたのは、肥後の歌(1406)一首である。

1406わかせこか狩にのみくるあはつのに草かくれつ、うつらなくなり

「粟津野」は、近江の国の歌枕で、現在の天津市膳所にあたる。「粟津」は、『催馬楽』(23)に

23 鷹の子は 鷹に賜はらむ 手に据ゑて 粟津の原の 御栗栖のめ
くりの 鶉狩らせむや さきむたちや

とあり、「粟津野」は、『古今六帖』(1200)に見い出される。この詠歌は、大伴家持の詠作の名が記されている。

1200 おもひでてこひしくもあるかあはづのの小萩が下にわがゆきしかり

『堀河百首』以前の勅撰集においては、『後拾遺集』(45)に一首のみ詠まれている。この歌は、『堀河百首』の詠作歌人達と同時代の歌人である権僧正静円の作である。

45 あはづののすぐろの薄つのごめはふゆたちなつむこまそいはゆる
また、『堀河百首』の詠出歌人である大江匡房の『江師集』512(『私家集大成中古Ⅱ』51)にあり、歌題にも見出せる。

粟津原有臂鷹之人

512 もろかへりそらとるたかをひきすゑてあはづのはらをかるとか
こそ

このように、「粟津野」は、万葉の歌人に拠って詠まれた歌枕であり、それらを典拠として、『堀河百首』詠出当時の歌人達に注目された歌枕と受け取れるであろう。

肥後の歌(1406)は、「粟津野」の「粟津」に「逢はず」の意を響かせた掛詞の用法に拠った詠歌であり、しかも、発想の典拠として『伊勢物語』第百二十三段の詠歌に求め、その歌は『古今集』(972)、『古今六帖』(1191)にも掲載されている。

972 野となれば鶉となりてなきをらむ狩たにやは君は来さらむ

また、「わかせこ」という万葉的な歌語を意識的に使用しながら、狩にのみ来る我夫を鶉に托し、憂き心を添えて、逢えない恨みの心を詠

じている。

次に、「布留野」を詠み込んだ歌は、『堀河百首』において二首(1408、1434)挙げられる。

1408 いにしえのふるの、みちをたつねきてし水をわれもむすひつる哉

(河内・野)

1434 うちにけり人にかよはぬいそのかみふるの、さはにわたすまろは

し(藤頭仲・橋)

この二首の他に、「布留京」を詠じた歌として二首(36・1513)見える。

36 いそのかみふるのみやこにはるくれば霞たなびくたかまとの山

(師頼・霞)

1513 わが心すきにしかたにたちかへりふるのみやこそ今もこいしき

(師時・田家)

この四首は、「布留野道」「布留沢」「布留京」が詠み入れ、「布留野」に関連した歌枕、地名が多数詠まれている。また、「布留野道」以外の「布留野沢」「布留京」は、管見の範囲において、その詠歌以前の歌例を挙げられず、新奇な意図をもった歌枕、地名と言える。

「布留野道」は、『貫之集』574(『私家集大成中古Ⅰ』57)に同歌は『古今六帖』(2922)にも掲載されている。『和泉式部集』632(『私家集大成中古Ⅱ』1)や『伊勢大輔集』95(『私家集大成中古Ⅱ』24)に見られる。

574 いその上ふるのの道の草分けて清水くみには又もかへらん

632 今よりはふるののみちに草しけみわすれ行にはさそまとふらん
95 いそのかみふるののみちのしるへには今日行末も君こそはせめ
いずれも、「布留」に「古」や「経る」を掛けた恋愛歌に仕上げてい

る。「布留野」は、大和国の歌枕で、『万葉集』(1357・2421)に見られる。

1357 石上布留の早稲田を秀でずとも縄だに延へて守りつつ居らむ

2421 石上布留の神杉神さぶる恋をも我はさらにするかも

この二首のように、「神杉」「早稲田」を詠み入れている。「布留」は「古」と同音で、しかも「石上」に「そのかみ」を掛けたり、古めかしく神さびたイメージに依拠し、それ以後、「古」に掛けた表現や、古いものの象徴をして用いられている。

「布留」に関連した歌枕、地名をちなみに『堀河百首』成立以前の勅撰集において、挙げてみると、『古今集』には、「布留の古道」(679)「ふるからの小野」(886)があり、『後撰集』には、「布留の山」(49)「布留野」(368)「布留のわさた」(513)がみえ、『拾遺集』には、「布留の社」(867)である。このように、「布留」は、『万葉集』以来詠み続けられた歌枕であり、しかも、「布留」に関連した歌枕、地名の多様化が成されている。

「野」の歌題において、「布留野」を詠じたのは、河内の歌(1408)で、「布留野」の「布留」に「古」の同音を響かせ、「経る」を掛け、しかも発想の典拠は、『古今集』887に求めている。

887 いにしへの野中のし水ぬるけれどもの心をしる人そくむ

2922 石上ふるのみちの草わけてしみづくみにはまたもかへらん

また、河内の歌と類型発想の詠歌は、前掲の『古今六帖』(2922)の詠歌であり、その詠歌と何らかの影響関係をみることも可能であろう。

「野」の歌枕、地名、名所のうち、『万葉集』から詠まれているものとして「武蔵野」が挙げられる。「武蔵野」は、『万葉集』巻十四に「武蔵国の歌」として独立した歌群が見られる。殊に、「武蔵野」は、『古今集』(867)に

867 むささきのひととゆえにむさしのの草はみなからあはれとそ見ゆ

とあり、『古今六帖』(1157)においても

1157 武蔵野の草のゆかりときくからにおなじ野ベともむつまじきかなとあり、「草」と結び付けて詠まれる歌例は、『古今集』以来多く見られる。

『堀河百首』において、「武蔵野」を詠み込んだ詠歌は四首見出せる。それらは次のようである。

132 むさしのはまたやかなくは春くれはいそきもえいつる下蔭かな

144 むさしのにことしはもえよ紫のわらひは草のゆかりならねと

1175 むさしのにわかしめゆひし若草をむすひそめつと人やしるらん

1402 旅人のゆくほととほきむさしのは草さへふかくなりけるかな

そのうち二首(132・144)は、「早蔭」の詠歌で、「武蔵野」と「蔭」の組み合わせで詠まれている。それは既に、指摘されているように、以前に歌例のない組み合わせであり、新しい試みである。^{註1)}「野」の歌題で詠まれたのは、藤原頭仲の歌(1402)であり、それは、『古今集』以来の「草」を詠み入れる作法を用い、武蔵野までの遠い道のりを、草が深くなるという時間的推移に拠って表現した歌と言える。

次に、「猪名伏原」について検討してみよう。「猪名」は、摂津の国の歌枕であり、『万葉集』以来、「猪名」の枕詞「しなが鳥」と共に詠作したものが多数を占めている。『堀河百首』において、「猪名伏原」を詠じたのは、二首(999・1403)あり、そのうち一首は「野」の歌題の藤原基俊の詠歌(1403)である。

1403 むかしみし道たつねれとなかりけりぬるてましりのゐなの伏原

「猪名伏原」の「猪名」に関しては、田尻嘉信氏が既に詳細な論考で指摘のとおり、古く『万葉集』では、「猪名野」(279・1140)「猪名湊」

(278)「猪名山」(2108)が詠まれている。「猪名伏原」は、勅撰集において、『拾遺集』(586)に見出せる。

586 しなか鳥猪名の伏原とひわたるしきか羽音おもしろきかな

『堀河百首』において、「猪名」に関連した歌枕、地名、名所が数多く詠まれている。「猪名伏原」(999・1403)、「猪名湊」(986)、「猪名野の沖」(1446)、「猪名端山」(1464)が挙げられる。

999 しなかとりのな伏原風さえてこやの池みつ氷しにけり(氷・仲実)

986 風さむみ夜やふてぬらむしなか鳥の湊に千鳥しはなく(千鳥・藤頭仲)

1446 おほみ舟るなの、沖のやほちからろ計そまかしけぬく(海路・源頭仲)

1464 しなか鳥あなのは山に旅寝してよはのひかたにめをさましつ(旅・俊頼)

このように、「猪名」は、『堀河百首』の詠出歌人達に注目され、多様化された歌枕、地名、名所と言えるであろう。

「宮城野」は、陸奥の歌枕である。殊に、『古今集』にみられる二首(694・1091)が有名である。

694 宮木のもとあらの小萩露をおもみ風をまつこときみをこそまて
1091 みさふらひみかさと申せ宮木の木の下露はあめにまされり

また、「宮城野」は、「もとあらの小萩」「小萩」「露」「木の下露」などの歌語といっしょに詠じられている歌例が多数を占めている。

『堀河百首』に「宮城野」を詠み込んだ歌は六首みられ、そのうちの半数の三首が「野」の歌題の詠歌である。また、「野」の歌題において、「宮城野」は一番多く詠まれた歌枕、地名、名所であり、その三首(1398・1400・1404)は次のようである。

1398 みやき野のち、の草葉をむすひをきて花みん程は絶す通はん
1400 さまぐくに心そとまるみやきの、花の色くむしのこゑく

1404 宮城野の秋の萩原わけゆけは上葉の露に袖そぬれぬる

この三首のうち、永縁の歌(1404)は、「萩原」とあり、萩の花を詠んでいると判かるが、その他の源頭仲の歌(1398)と源俊頼の歌(1400)の二首は、「宮城野」と共に野に咲く花を詠み、萩の花という限定が成されていない。前述のように、『古今集』以来、「宮城野」には、「小萩」「萩」という定着されたイメージが出来ているが、殊に、源俊頼の歌における「花のいろいろ」は、萩の花だけでなく、宮城野の秋に咲く多種類の花に注目している。秋の野に咲く花々を詠じた歌は、既に、『万葉集』(154)に、「山上臣憶良、秋野の花を詠む歌」

154 秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花とあり、発想の典拠を『万葉集』に仰いでいると考えられる。

このように、「宮城野」と秋の花という組み合わせは、『古今集』以来、定着した「宮城野」と「萩」というイメージと異なり、新しい組み合わせに拠った新奇な試みの一つと受け取れるであろう。

「野」の歌題の詠歌において、俊頼の歌と同様に、秋の野辺の花々に視点を置いた詠歌として、源師頼の歌(1396)と隆源の歌(1405)が挙げられる。

1396 秋の野を心のさらにわけゆけはをのいろいろさける花かな

1405 ともかくも人はいはての野へにきてちくさのはなをひとりみる哉
俊頼の詠歌は、『堀河百首』詠出歌人の間に少なからず影響関係があったと予測できるであろう。また、前述のように、「野」の歌題のうち、四首(1396・1398・1400・1405)が、秋の野に咲く花々を注視した類型的発想の詠歌であり、それは、「野」の歌題における特徴的な詠法の一つとして捉えられる。

「野」の歌題で、一首の歌の中に複数の歌枕、名所を詠み込んだ歌が一首(1401)挙げられる。

1401 みたせはさかも枯野となりけり今やをくらはもみちなるらん
これは、源師時の詠歌で、「嵯峨」と「小倉」が詠み込まれている。
「嵯峨」は、「嵯峨野」と捉えてよいだろう。また、「小倉」も「小倉山」をさし、嵯峨の西にある山で、古来、もみじの名所とされている。この二つの名所、歌枕は、嵯峨の近辺の名所、歌枕であり、いずれもよく詠まれ、かなり一般化されている名所、歌枕である。

この師時の歌のように、上句から下句を推定するという構成をもつ詠歌は、『古今集』1077に見られる。

1077 深山にはあられ降らし外山なるまさきのかつら色つきにけり

このような発想に、「嵯峨」や「小倉」の歌枕や名所を詠み入れることは、土地の実在性があり、二つの地理的關係がこの歌にとって大事な要素となっている。

このように、「嵯峨」や「小倉」というかなり一般化した歌枕、名所複数詠み込むという詠法は、新しい工夫の一つと言えるであろう。

以上のように、「野」に詠まれた歌枕、地名、名所の特徴をみると、『堀河百首』において新たに注視された歌枕、地名としては、「あけののほら」や「いはて野」挙げられ、「いはて野」は『堀河百首』詠出当時に機縁に詠まれるようになったと推察できるだろう。また、「入野」や「栗津野」のように、『催馬楽』や『万葉集』に詠まれた歌枕で、その後詠歌例がなく、しかも『堀河百首』詠出時代を契機に歌枕として定着化していったと察せられる。また、『堀河百首』の詠出歌人達に拠って「猪名伏原」や「布留野」のように多様化された歌枕、地名がみげられ、「宮城野」のように、「宮城野」と「花」という歌枕との目新しい組み合わせに拠る歌枕表現が挙げられる。

このように、歌枕、地名が重要な役割を持っている歌題の一つである「野」においては『堀河百首』詠出歌人達の間で馴染みのない、新しく珍しい歌枕、地名を追求することに苦心している姿が窺える。そ

れは、『堀河百首』詠出歌人達は、既成の歌枕、名所以外に新奇な地名を詠み込むことに拠って詠歌世界の拡大を計ったものと言える。しかも、堀河百首題「野」においては、「いはて」、「入野」、「栗津野」のように、後世に影響を与え、新しい歌枕表現の獲得に契機になったと言えるであろう。

〈注〉

- (1) 鳥井千佳子氏「堀河百首」とその背景——周辺の歌学書との関連における——(『中古文学』第36号 昭61・3)
- (2) 田尻嘉信氏「元永六年十月二日『内大臣家歌合』の名所詠」(『跡見学園国語科紀要』第34号 昭61・4)

引用した『万葉集』、『古今六帖』及び勅撰集は、『新編国歌大観』(歌番号も同本に拠る)に拠った。ただし表記については改めたところがある。